

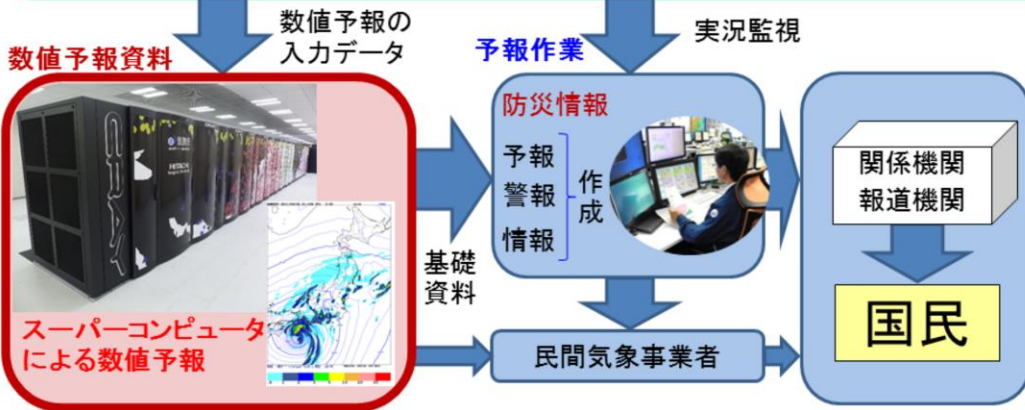


第1章 基礎編

1.1 概要

気象予報業務における数値予報の役割

観測資料

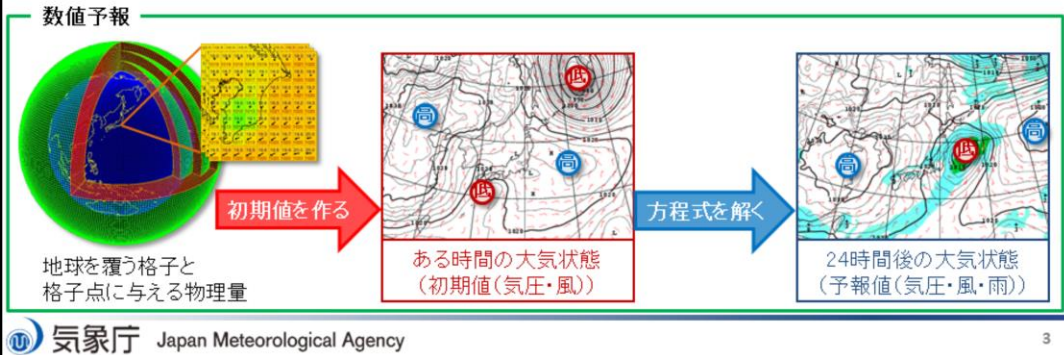
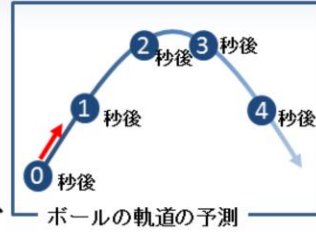


風や気温などの大気状態や降水などの現象を把握するために、スライドにあるように直接観測や衛星観測などの様々な手段を用いて気象観測が行われている。観測・通報されたデータはリアルタイムの実況監視に利用されるほか、数値予報の入力データとして利用されている。数値予報では、現在の大気状態から未来の大気状態を予測し、気温や風、降水などについての各種数値予報資料を作成する。数値予報の一連の処理はスーパーコンピュータにより高速かつ確実に実行される。

数値予報資料は天気予報、注意報・警報や気象情報などの防災情報を作成する際の基礎資料として利用され、防災情報は関係機関や報道機関を通じて国民に提供される。現代の天気予報や防災情報の作成作業に数値予報資料は必要不可欠であり、数値予報は予報業務における重要な基盤技術となっている。また数値予報資料は民間気象事業者にも提供されていて、様々な形で利活用されている。

数値予報とは

- 大気現象を支配する方程式をコンピュータ(計算機)で解くことで、未来の大気状態を予測すること。
- 数値予報の基本的な考え方
 - ボールの軌道の予測と原理は同じ。
(最初のボールの位置や速度、ボールに加わる力が分かればボールの軌道が予測できる)
 - 数値予報では、現在の大気状態を計算機上に作り、方程式を解いて未来の大気状態を予測する。

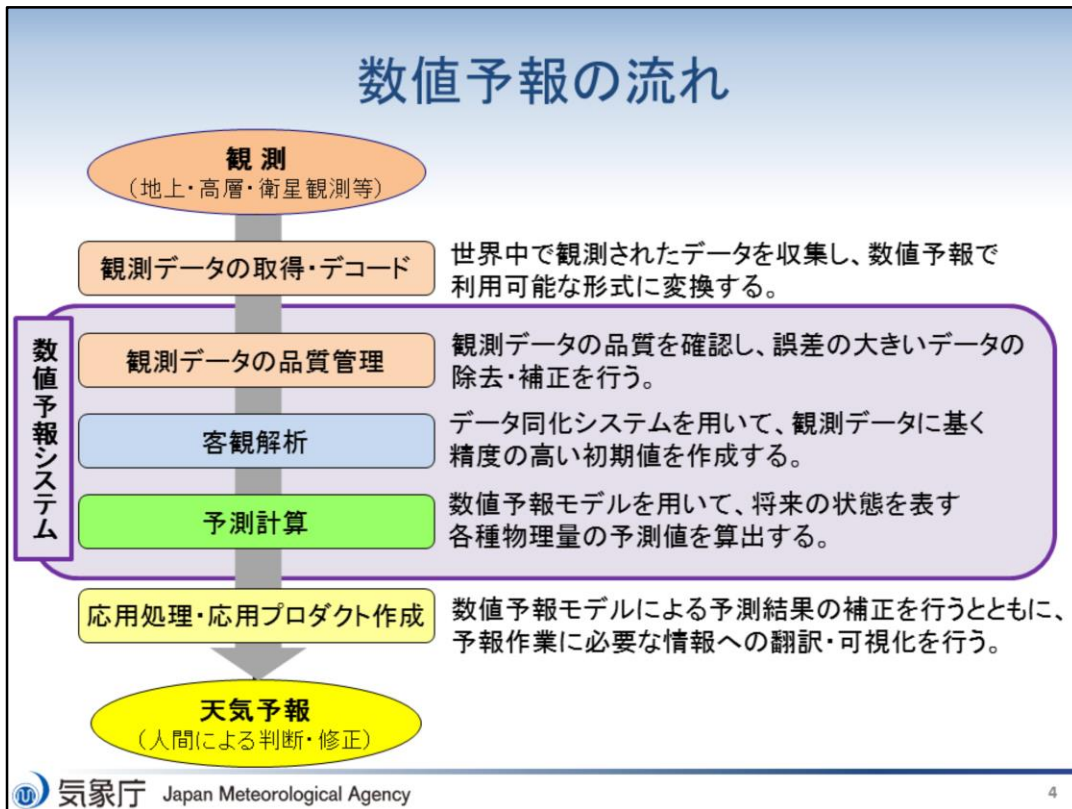


数値予報とは計算機を用いて地球大気の数値シミュレーションを行い、ある時点の大気状態から未来の大気状態を予測することを指す。

空中に投げたボールの軌道の予測を例にとると、最初の状態(位置と速度)とボールに加わる力(重力や空気抵抗)が分かれば、支配方程式(ニュートンの運動方程式)を計算機で解いて1秒後のボールの状態が予測できる。1秒後のボールの状態が分かれば2秒後のボールの状態が予測でき、これを繰り返すことで地面に落ちるまでのボールの位置や速度を予測し続けることができる。ボールの軌道の予測と比べて大気現象を支配する方程式や実際のシミュレーションは複雑だが、数値予報でも基本的な考え方は同じである。

計算機では離散的な値しか取り扱うことができないため、数値予報を実行するには現実の連続した地球大気を細かい格子で分割して、空間を離散化する必要がある。時間についても同様に有限の時間間隔で離散化して取り扱う。格子上の各点には、ある時刻における気象要素(気圧、気温、湿度、風などの物理量)を与えて、計算機上で仮想的に地球大気を再現する。数値予報を開始する時刻における計算機上で再現された地球大気は初期値と呼ばれる。ボールの軌道の予測と同様に方程式を解いて少し先の予測を繰り返すことで、未来の地球大気の状態が予測できる。

スライドには数値予報の初期値と予報値の例を示している。初期値では低気圧が九州南方海上にあって、北日本は三陸沖に中心を持つ高気圧に覆われている。この状態から支配方程式を解いて得られた24時間後の大気状態の予測が右図の予報値である。予報値では九州南方海上にあった低気圧は24時間後には三陸沖に、三陸沖に中心を持つ高気圧は日本のはるか東へと移動し、北日本から東日本の広い範囲で雨が降る予測となっている。



スライドには数値予報のおおまかな流れを示している。

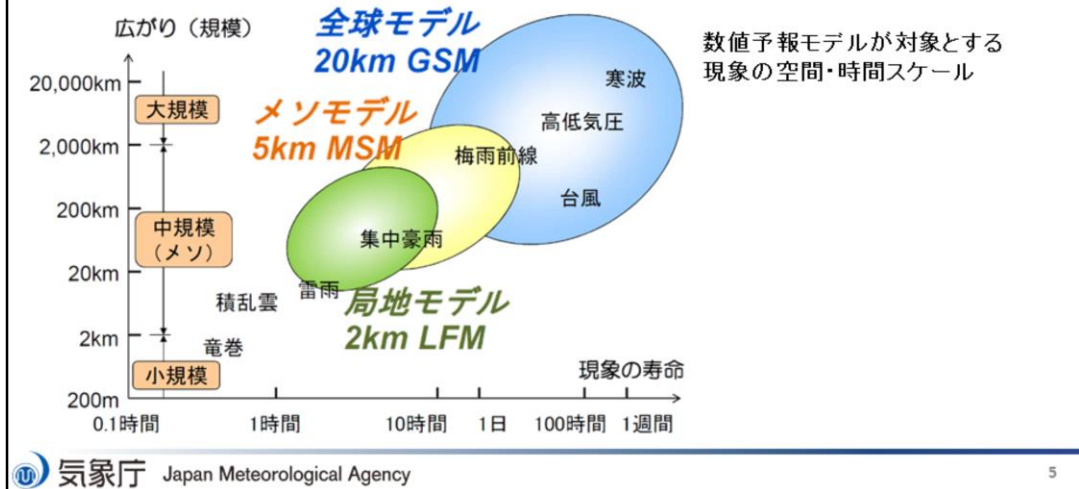
まず、現在の大気の状態を知るために、世界中の観測データを収集し、数値予報で利用可能な形式に変換(デコード)する。観測データには様々な理由で誤差が含まれていて、中には精度が悪く数値予報への利用に適さない観測データも存在するため、収集した観測データの品質を確認し、誤差の大きいデータについてはデータの除去、補正(品質管理)を行う必要がある。次に、品質管理により選別された観測データを利用して数値予報の初期値を作成する。数値予報の初期値を作成する過程を客観解析(データ同化)と呼ぶ。数値予報では初期値の精度が予測精度に及ぼす影響が大きいいため、精度の高い初期値を作成することは非常に重要である。

データ同化により得られた初期値から、数値予報モデルを用いた予測計算を実行することで、未来の大気の状態を表す各種物理量の予測値を算出する。数値予報モデルの実行により得られた予測値は数値の羅列であり、ユーザーが利用しやすい形式に加工する必要がある。この過程を数値予報の応用処理、応用処理で得られる結果を応用プロダクトと呼ぶ。応用プロダクトには、可視化した図形式の資料や、利用しやすい要素への変換、統計的な修正を行った「ガイダンス」と呼ばれる資料があり、これらは天気予報や防災情報作成の際の基礎資料として用いられる。

以上の数値予報の流れのうち、観測データの品質管理から予測計算までを含めた処理を実行するプログラム群を数値予報システムという。

数値予報モデルの種類

- 全球モデルと領域モデル
 - 全球モデル：地球全体が対象。予報時間は長いが低解像度。
 - 領域モデル：特定の地域が対象。予報時間は短いが高解像度。
- モデルの解像度によって予測可能な現象のスケールが異なる。
 - モデルの特性や予測可能限界を把握して適切に利用することが重要。



地球全体を対象とした数値予報モデルを「全球モデル」、予報領域を特定の地域に限定したものを「領域モデル」と呼ぶ。一般的に領域モデルでは全球モデルに比べて格子間隔が小さく（解像度・分解能が高く）、予報時間は短い。

気象現象には、高気圧や低気圧、台風、梅雨前線などの大規模な現象から、積乱雲や集中豪雨、竜巻などの小規模な現象まで、様々な空間的広がりを持った現象が存在する。この気象現象の空間的規模（広がり）を空間スケールと呼ぶ。現象の空間スケールと持続時間（時間スケールと呼ぶ）には相関があつて、大規模な現象は持続時間が長く、小規模な現象は持続時間が短い。例えば、大規模な現象である台風の寿命は数日から十日程度だが、台風の周辺で発生する個々の積乱雲は小規模な現象でその寿命は数時間である。

数値予報モデルが予測対象とする現象の空間・時間スケールは数値予報モデルの解像度に依存し、解像度が高いほど小さい空間・時間スケール（小規模・短寿命）の現象が予測可能となる。図に示すように、高解像度な領域モデルでは全球モデルよりも細かいスケールの現象を予測対象とすることができる。モデルによって予測対象とする現象の時間・空間スケールが異なることやモデルの予測可能限界を理解した上で、現象や用途に合わせてそれぞれの数値予報モデルを適切に利用することが望ましい。

。

決定論的予報とアンサンブル予報

- 決定論的予報
 - データ同化によって得られた解析値を初期値として実行される数値予報。
 - 数値予報モデルでは、初期値と予報値が一対一対応の関係にある。
(初期値が決まれば予報値が決まる)
 - 初期値や境界値、数値予報モデルに含まれる誤差により、予測には必ず誤差が含まれる。
 - 数値予報の誤差の大きさは、その時々の大気状態で異なるため、一つの決定論的予報の結果で予測の誤差を見積もることはできない。
- アンサンブル予報
 - 予測の誤差を見積もるために、揺らぎを与えた複数の初期値から実行する数値予報。
 - 決定論的予報では知り得ない、予測の誤差や不確実性、信頼性といった情報がアンサンブル予報では得られる。
 - 初期値だけでなく境界値や数値予報モデル自体の不確実性を考慮するアンサンブル予報や、これらを組み合わせたアンサンブル予報もある。

数値予報モデルでは、初期値が与えられれば計算結果である予報値は一意に求まる。このためデータ同化によって得られた解析値を初期値として実行される数値予報を「決定論的予報」と呼ぶ。しかしどれだけ精度良く求めても初期値や境界値には誤差が含まれる。また数値予報モデル自体も、モデル化の際の近似や仮定、あるいは空間・時間の離散化のために予測には必ず誤差が生じる。数値予報では初期値に含まれる僅かな誤差が時間の経過とともに増大するが、この誤差の成長は大気の状態によって大きく左右され、同じ数値予報モデルを用いても、予測に含まれる誤差はその時々の大気の状態によって異なる。そのため、与えられた初期値に対して予報値が一意に決まる決定論的予報では、予測の誤差(不確実性)を事前に知ることはできない。

決定論的予報に対して、予測の誤差を見積もるために、初期値に僅かな揺らぎを与えて行う複数の予測を「アンサンブル予報」と呼ぶ。あるいは境界値や数値予報モデルを置き換え、これらの不確実性を考慮するアンサンブル予報もある。アンサンブル予報では、複数の予報値を利用することで予測の誤差を事前に見積もることができ、予測の信頼性に関する情報を得ることができる。

気象庁の運用する数値予報システム

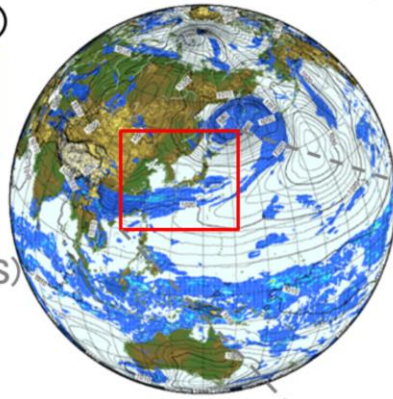
計算機資源の有効活用のために、用途に応じた複数のシステムを運用

全球モデル(GSM)

水平解像度 約20km
1日1回264時間予報
1日3回132時間予報

全球アンサンブル予報システム(GEPS)

水平解像度 約40km
1日2回264時間予報
(台風向け1日2回132時間)
27メンバー



局地モデル(LFM)

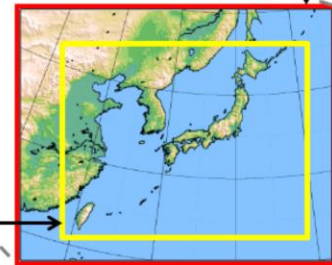
水平解像度 2km
1日24回10時間予報

メソモデル(MSM)

水平解像度 5km
1日2回51時間予報
1日6回39時間予報

メソアンサンブル予報システム(MEPS)

水平解像度 5km
1日4回39時間予報
21メンバー



気象庁では、全球モデルとしてGSM (Global Spectral Model)、領域モデルとしてMSM (Meso-Scale Model)とLFM(Local Forecast Model)を運用している。

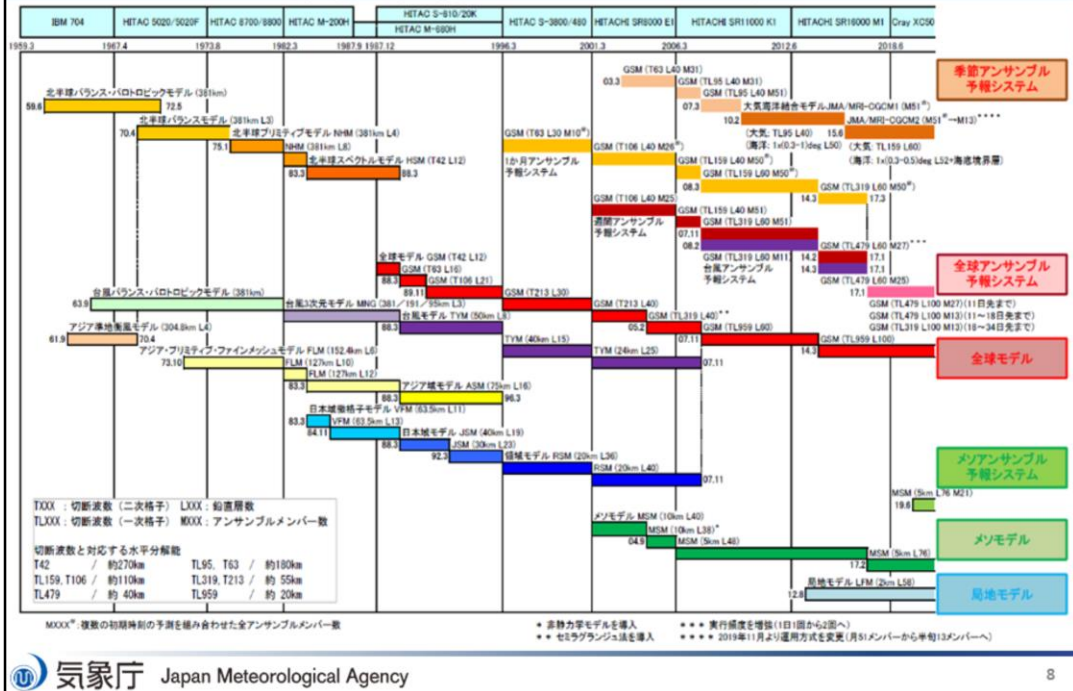
GSMの水平分解能は約20km(日本付近の中緯度帯)で、1日1回(12UTC)の264時間予報と1日3回(00,06,18UTC)の132時間予報を実行している。MSMは水平分解能が5kmで、1日2回(00,12UTC)の51時間予報と1日6回(03,06,09,15,18,21UTC)の39時間予報を実行している。LFMは水平分解能が2kmで、1日24回(毎正時)の10時間予報を実行している。

また上記の決定論的予報に加えて、全球アンサンブル予報システム(Global Ensemble Prediction System, GEPS)とメソアンサンブル予報システム(Meso-scale Ensemble Prediction System, MEPS)を運用している。

GEPSはメンバー数27、水平分解能が約40km(日本付近の中緯度帯)で、1日2回の264時間予報(00,12UTC)と1日2回の132時間予報(06,18UTC)を実行している(※)。MEPSはメンバー数21、水平分解能が5kmで、1日4回の39時間予報(00,06,12,18UTC)を実行している。

※06,18UTC初期時刻のものは、全般海上予報区(赤道-60° N、100° -180° E)内に台風が存在する、または同区内で24時間以内に台風になると予想される熱帯低気圧が存在する場合、または、全般海上予報区外に最大風速34ノット以上の熱帯低気圧が存在し、24時間以内に予報円または暴風警戒域が同区内に入ると予想された場合に気象業務支援センター経由で配信される。

気象庁のスーパーコンピュータと 数値予報システムの歴史



スライドには気象庁のスーパーコンピュータ(超並列計算機)と数値予報システムの変遷を示している。

現在運用中のスーパーコンピュータシステム(2018年6月5日から運用開始)は第10世代目のもので、その理論最大性能は18,166TFLOPS(1TFLOPSは1秒回に1兆回計算できることを示す単位)、第9世代のスーパーコンピュータシステムの約10倍の性能となっている。

数値予報システムについても継続的に開発を実施し、観測データの利用の拡充、データ同化システムの高度化、数値予報モデルの精緻化や高解像度化を繰り返してきた。観測データの処理やデータ同化、数値予報モデルの実行、応用プロダクトの作成など、数値予報システムの運用には膨大な計算量が必要となる。数値予報システムの高度化にはさらなる計算量が要求されるため、より高度な数値予報システムを運用するにはより高性能なスーパーコンピュータが不可欠であり、数値予報とコンピュータ技術とは密接な関係にある。

参考文献

- 本田有機, 室井ちあし, 2018: 概要. 平成30年度数値予報研修テキスト, 気象庁予報部, 66-71.